第８回アジア原子力人材育成会議の概要

１ 開催時期　平成３０年２月７日～９日

２ 開催場所　福井県若狭湾エネルギー研究センター

３ 参 加 者　オーストラリア、インドネシア、マレーシア、フィリピン、スリランカ、
タイ、トルコ　計８名
国際原子力機関（ＩＡＥＡ）　２名
国内関係者　１５名

４ 会議概要

【セッション１】基調講演

ＩＡＥＡは、世界の原子力の状況について紹介するとともに、原子力発電が今後もパリ協定の下で重要な役割を果たす旨の基調講演を行った。その後、経済産業省資源エネルギー庁が、福島第一原子力発電所の最近の状況や原子力政策の現状について紹介したほか、文科省が、原子力研究開発に関する議論の状況や「もんじゅ」サイトに建設される新たな研究炉の建設計画についての説明を行った。また、（公財）若狭湾エネルギー研究センターは、福井県における人材育成活動について講演を行った。

【セッション２】原子力政策と課題に関する各国の発表

研究炉の状況と原子力コミュニケーターの育成について、参加各国から紹介された。

（主な内容）

・オーストラリア原子力科学技術機構（ＡＮＳＴＯ）が所有する研究炉には、年間約１５，０００人の生徒が訪れる。オーストラリア原子科学技術研究所（ＡＩＮＳＥ）は、ＡＮＳＴＯとオーストラリアの３５校の大学およびニュージーランドの５校お大学の間の連携を支援しているほか、高校生のための職学金給付や研修を実施している。

・インドネシア大統領は、原子力発電導入のためのロードマップの作成や研究炉の建設が必要との認識を示している。また、インドネシアの多機能研究炉では、ＲＩ製造、中性子放射化分析、宝石への照射が行われており、その利用率は９５％に達している。

・マレーシアの第１１次原子力計画では、原子力発電の理解促進のためのコミュニケーションが極めて重要である旨記載されている。

・フィリピンの２０４０年のエネルギー構成見通しにおいては、原子力発電もエネルギーミックスの一つとして考慮されている。また、ロシアの国営原子力企業であるロスアトムとフィリピンエネルギー省の間で合意覚書が締結され、この覚書には基盤整備や人材育成が記載されている。

・スリランカは、大学や高校など公衆の各レベルに応じた人材育成プログラムを展開

している。今後は、住民理解のための展示物や学習プログラムの展開を目標としている。

・タイは、１０００MW原子炉２基を２０３５年と２０３６年に建設する予定である。また、タイ国家原子力技術研究所は２０３０年までに新たな研究炉を導入することを計画している。

・トルコでは、イスタンブール工科大学が所有するＴＲＩＧＡ Ｍａｒｋ Ⅱ原子炉およびトルコ原子力局が所有するＴＲ２原子炉の２基の研究炉があるほか、ハジェテペ大学が０パワーの研究炉の建設申請を計画している。

【セッション３】議題「原子力コミュニケーターの育成について」

原子力コミュニケーター育成支援についてのＩＡＥＡのリードスピーチと、福井県による原子力コミュニケーターとしての取組みの紹介の後、以下のような討論を行った。

[1] 原子力コミュニケーターは、原子力安全やセキュリティについてのリスク面と同時に、原子力がもたらす便益についても意思疎通することが必要である。

[2] ステークホルダーがどのような集団であるか、また彼らが何を懸念しているかを理解し、それに対応していくことが支持を拡大するために有効である。

【セッション４】議題「世界で必要とされる研究炉について」

ＩＡＥＡによる原子力人材育成における研究炉の役割についてのリードスピーチの後、以下のような討論を行った。

[1] 研究炉は、原子炉の挙動を専門家に理解させることができるほか、安全文化への理解を深めさせることを通じて、原子力発電計画を支援する重要な役割を果たすことができる。

[2] 研究炉は、原子力コミュニケーションのための非常に良いツールとして役立つ。

【閉会セッション】総括

・２０１９年度の第９回会議では「Knowledgeable Customer on Nuclear Power(原子力分野における賢明な顧客)」を議題として実施することが提案された。